

■日本燃焼学会創立50周年記念特集■

本会創立の経緯と第 15 回国際燃焼シンポジウムの思い出

名誉会員 秋田 一雄

本会創立にはやや複雑な経緯がある。この創立に尽力された多くの方々は故人となられ、当時の事情を知る人が殆どいないように思うので、ここに私の持っていた資料をもとにその経緯を記しておきたいと思う。

先ず、その頃日本学術会議に燃焼研究連絡委員会なる組織があり、そこで燃焼に関係のある学会から代表委員が出ていろいろな企画や調整をしていた。それを国際的な燃焼学会への対応を含めて日本における燃焼研究の全国組織を立ち上げようとしたのが日本燃焼懇話会であり、その最初の会合が開かれたのが昭和 28 年(1953 年)11 月 11 日である。この懇話会は昭和 30 年(1955 年)3 月までに 4 回開かれているが、その間の委員は会長が八木先生、幹事は熊谷、疋田、芥川、清水、坂本の各先生で、いずれも燃焼研連の委員である。その後、この会は現在の日本燃焼学会の前身である日本燃焼研究会の設立に向けて、昭和 30 年(1955 年)3 月 3 日の幹事会を経て、同年 4 月 23 日に会名や規定の最終案を検討し、同年の 5 月 25 日(金)に創立総会を開いて正式に日本燃焼研究会への移行を決めた。日本燃焼研究会の創立日については、準備会の性格を持つ日本燃焼懇話会の発足した昭和 28 年 11 月 11 日とするか、上記の昭和 30 年 5 月 25 日とするかいろいろな意見があったようであるが、昭和 30 年度の日本燃焼研究会の決算報告には昭和 28 年度と昭和 29 年度の日本燃焼懇話会の収支が合わせて報告されていることなどからみて、筆者は後の方の日付にするのが妥当と考えてきた。ちなみに、その懇話会の支出は昭和 28 年が会合費と通信費を合わせて 2,114 円、29 年は、諸雑費が加わって 11,494 円であるが、昭和 30 年になると 135,024 円と著しく増加している。これは本会発足後の事業の一つとして燃焼に関する内外の論文抄録を行ない、これを印刷、配布したことによる。後に中止されたこの論文抄録の配布は 30 年 10 月より始まったが、機関誌「燃焼研究」の発行は昭和 34 年(1959)12 月からだからその頃には未だ出ていない。なお、会員数は制度が今とは違って関連学会選出会員というのがあり、昭和 30 年度の名簿によると、全数は 25 名、一般会員は個人会員と呼ばれ、その年には僅か 12 名である。会費は 600 円、維持会員は 18 社、会費は一口 10,000 円で、会計報告を付き合わせると二口以上の維持会員はいない。創立時の昭和 30 年度の役員は会長が八木先生、前期の 5 人の先生方が幹事、維持会員の伊藤、小幡の両氏が監査役を務められた。

これが 31 年度になると、学会選出会員は変わらないが、個人会員は 33 名、維持会員は 19 社と増し、また、幹事に金原、飯田の両先生が加わって役員は 8 人となっている。ただし、学会選出会員の制度は創立から 2 年間で消え、昭和 33 年(1958)2 月の定時総会の名簿には会員は正会員と維持会員の二つしかない。さらにこの年には事業としての論文抄録のほか国際協力、講演会、見学会などの活動に担当幹事が決められ本格的な会の運営が始まっている。

筆者はこの論文抄録の行なわれていた時代から事務局が京都に移るまでの長い期間、会誌の発行、総会、講演会、見学会の立案、実施などの燃焼研究会の多くの事務に携わってきたので、色々な出来事や思い出も少なくないが、際限がないので、この辺で創立の経緯については終わりとし、次ぎの第 15 回国際燃焼シンポジウムの話に移りたい。なお、ここまでの経緯のもう少し詳しい記録については、「燃焼研究」第 68 号(1985 年 4 月)に記したことがあるので、興味のある方はご覧頂きたい。

さて、第 15 回国際燃焼シンポジウムは、ご存知のように昭和 49 年(1974 年)8 月 26 日～30 日に開かれているから、日本燃焼研究会が創立されて 19 年目に当たる。もとより、日本における初めての国際燃焼シンポジウムであり、日本の威信にかけても失敗は許されない。そのため早くから疋田先生を委員長とする組織委員会が作られ、必要な準備が進められた。このシンポジウムが成功裏に終り、日本支部の評価が上がったことはご存知の通りである。筆者も事務局の総括担当者として実施のお手伝いをしたが、このシンポジウムの詳細は、「燃焼研究」第 37 号(1974 年 12 月)の第 15 回国際燃焼シンポジウム特集号に詳しいのと、中心的な役割を果たされた方の多くは既に亡くなられているが、これに参加されて内容をよく知っていただける人も多いので、行事の詳しい内容は上記の報告書をみて頂くことにして、ここではそれに書かれていない舞台裏の幾つかを記すことにしたい。

まず、事務局の開設であるが、これは疋田組織委員長や功刀実行委員長と図り、シンポジウム会場である日本都市センターに近く、各種の準備委員の方々が立ち寄り易い都道府県会館の一室を借り、約一月前から必要な資料などを持ち込み、職員を常駐させた。ここでの仕事は講演会場の設定から参加者の登録や宿泊の準備、さらに両替の手続きにいたるまで実に多彩で、しかも殆どの人が初めての仕事

という難しさがあつた。過去に外国で開催されたいろいろなシンポジウムの見聞を唯一の拠り所にしたが、不安もあるし、物品一つ買うにしても現在のように電話一本で届けてくれる時代ではないから、他の仕事はすべて犠牲にして毎日のようにこの事務局を拠点に、外回りをしたり、会場との間の行き来を頻繁に行ったことをよく憶えている。忙しきは期日が近づくにつれ増し、今思うとよく続いたなと感じるが、これは功刀先生を中心とした実行委員会だけでなく、熊谷先生が委員長を勤められた講演委員会や金原先生が委員長の婦人プログラム委員会などの総ての部門でも同じであつたように思う。多くの方がそれぞれの立場から大きな労力を払われたことは間違いない。なお、来日された国際燃焼学会の幹部への接待や難しい翻訳などについては、八木先生が世話して下された語学に堪能で国際シンポジウムに経験の深い方をお願い出来たので大助かりをした。ただ、残念なことに、その方のお名前は組織委員会の名簿にはなく、私も思い出せないが、影の功労者と今でも考えている。

次ぎに記しておきたいのは、必要な費用のことである。言うまでもなく、これを日本燃焼研究会が負担することは到底出来ないから、募金をしなくてはならない。このため募金委員会が設けられ、委員長は当時の東京ガスの安西社長が引きうけられた。最初の会合で募金は私に任せて、準備に力を注いで下さいとのことで、我々はこれについての総てをお願いすることにした。しかし、どれだけ集まるかは分からないし、他の収入も必要と考えて、当時、昭和45

年(1970)に開かれた大阪万博の余剰金が基金として蓄えられ、これが学術的な行事へ貸与されていたため、伝を求めてその使用を申請することにした。交渉は上手くゆき、金額は既に資料が紛失して分からないが、かなりの額であり経理の余裕が得られたことは事実である。この費用は残りが生じ、その分は契約に基いて最後に返却したことを憶えている。

もう一つ、忘れられないのが必要な関係費用の免税措置である。これは旧大蔵省、今の財務省に申請する必要がある、何回も足を運んだが、その返事が中々なく、間に合わなくなつては大変なので、最後は手土産を持って頼みに行つて漸く許可されたと言うこともあつた。

最後に、今回来日された時の国際燃焼学会の G. C. Williams 会長や B. Lewis 教授などの方にお土産を贈ろうということになり、いろいろ考えて錦絵の羽子板となつた。ただ、どういうわけかその内一枚が残り、組織委員長の疋田先生が「君持ってゆけよ」と言われて、有難く頂戴したこともあつた。この羽子板は今でも我が家にとってある。また、このシンポジウムの最後の日である30日には東京丸の内の三菱重工の本社前に仕掛けられた時限爆弾が爆発するというテロがあり、8人の死者が出て、その影響をかなり心配したことも忘れられない思い出である。

あれから約30年が過ぎたが、このシンポジウムは私にとって貴重な経験であり、今では懐かしい思い出となっている。